

第2節

同志国との訓練・演習など

自国の平和を維持するためには、抑止力・対処力を強化するのみならず、自国を取り巻く安全保障環境の安定化が不可欠である。そのため、防衛省・自衛隊は、自由で開かれたインド太平洋 (FOIP) の実現に向けた取組として、広くインド太平洋地域において同盟国・同志国などとの共同訓練を積極的に推進している。特に、わが国の安全保障と密接な関係を有するインド太平洋地域にお

いて、パートナーシップを強化するとともに、共同訓練などといった共通の努力を同盟国・同志国などで行い、各国の能力・練度の維持・向上および共同・連携による抑止力・対処力の強化により、相乗効果を発揮することで、力による一方的な現状変更やその試みを許さない安全保障環境の創出を図っている。

1 同志国との二国間共同訓練

1 令和7年度仏陸軍との実動訓練「ブリュネ・タカモリ25」

陸自は、2025年9月、フランス領ニューカレドニアにおいて、フランスとの共同訓練を行った。本訓練には、ニューカレドニア駐屯フランス軍に所属する海・空軍部隊が初めて参加し、対ゲリラ・コマンドウ作戦にかかる作戦遂行能力および戦術技量の向上を図るとともに、フランス陸軍などとの相互理解・信頼関係を促進した。

2 令和7年度英陸軍との実動訓練「ヴィジラント・アイルズ25」

陸自は、2025年11月、国内において英陸軍との共同訓練を行った。本訓練では、対着上陸作戦にかかる実動訓練を行い、作戦遂行能力、戦術技量の向上を図るとともに、英陸軍との相互理解・信頼関係を促進した。

3 令和7年度印陸軍との実動訓練「ダルマ・ガーディアン25」

陸自は、2026年2月から3月にかけて、インドにおいてインド陸軍との共同訓練を行った。本訓練では、敵

UAVによる攻撃や情報活動を模擬した状況下において、陸自の訓練部隊がUAV対処器材を用いてこれを無力化する行動などを演練し、対テロ戦にかかる作戦遂行能力および戦術技量の向上を図るとともに、インド陸軍との相互理解・信頼関係を促進した。

4 令和7年度インド太平洋方面派遣「IPD25」
Indo-Pacific Deployment

海自は、2025年4月から11月の約7か月にわたり、護衛艦4隻、輸送艦1隻、哨戒機1機、潜水艦数隻を含む水上・潜水艦の各部隊をインド太平洋地域に幅広く派遣した。IPD25では、海上自衛隊として初めての派遣となるサモア独立国、ツバルおよびナウル共和国を含む22か国を訪問し、27件の共同訓練・3件の親善訓練¹を行った。

特に、IPD25部隊の一部は、ミクロネシア連邦、ソロモン諸島、ナウル共和国、マーシャル諸島共和国、キリバス共和国、トンガ王国、ツバル、パプアニューギニア独立国、サモア独立国、パラオ共和国、フィジー共和国と二国間共同訓練を実施し、太平洋島嶼国との連携強化を図った。



動画：令和7年度仏陸軍との実動訓練 (BT25)

URL：https://m.youtube.com/watch?v=RqcX4nCHF8&pp=ygUY44OW44Oq44Ol44ON44K_44Kr44Oi44Oq



1 2025年度は、インドネシア、タイ、ブルネイ、セーシェル、スリランカ、マーシャル、南アフリカ、シンガポール、イギリス、カタール、韓国などを行った。

5 日比HA/DR共同訓練 「ドウシン・バヤニハン5-25」

空自は、2025年10月、フィリピンで行われた日比HA/DR共同訓練「ドウシン・バヤニハン5-25」に参加した。本訓練は、HA/DRに関する能力向上、フィリピン空軍との連携強化を目的としたものであり、物料投下訓

練、大量傷病者救護訓練などを行った。

本訓練には、日比RAAが初めて適用された。また、同年9月30日深夜に発生したセブ島沖地震対策のため、フィリピン側の要請を受け、当該共同訓練に参加していた自衛隊輸送機がフィリピン国内で救援物資の輸送支援を行った。

2 同志国などとの多国間訓練

1 米豪主催多国間共同訓練 「タリスマン・セイバー25」

自衛隊は、2025年7月から8月にかけて、米豪主催、カナダ、フィジー、フランス、ドイツ、インド、インドネシア、オランダ、ニュージーランド、ノルウェー、パプアニューギニア、フィリピン、シンガポール、韓国、タイ、トンガおよび英国の18か国による多国間共同訓練に参加した。本訓練は、海上作戦訓練、水陸両用作戦訓練、宇宙作戦訓練などを共同で実施し、自衛隊の統合運用能力の維持・強化および各国軍との連携・信頼関係の強化を図った。

特に、日豪円滑化協定（RAA）によって、相互の派遣プロセスが迅速化された結果、本訓練では、1,500名を超える過去最大規模の自衛隊員が参加した。また、AUKUS「第2の柱」の取組の一環として行われた海洋無人機システムの水中音響通信にかかる実験演習に初めて参加した。

2 米比主催多国間共同訓練 「バリカタン25」

自衛隊は、2025年4月から5月にかけて、米比主催の多国間共同訓練にオーストラリアと共に参加した。本訓練では、2012年以降、自衛隊はオブザーバーとして参加していたが、2025年度には、初めて艦艇などを派遣し、多国間海上機動の実動訓練や統合防空ミサイル防衛、サイバー攻撃等対処などの専門家交流、人道民生支援などに参加した。

3 令和7年度米尼軍等との実動訓練 「スーパー・ガルダ・シールド25」

自衛隊は、2025年8月から9月にかけて、米陸軍およびインドネシア陸軍が主催する多国間共同訓練に参加した。本訓練には、オーストラリア、カナダ、フランス、ドイツ、日本、オランダ、ニュージーランド、シンガポール、韓国および英国が参加している。本訓練は、空挺作戦、水陸両用作戦および戦闘射撃訓練を共同で実施し、自衛隊の戦術技量の向上および各参加国軍との連携を強化した。空挺作戦に関する訓練では、空自による航空機の支援を受け、水陸両用作戦に関する訓練では、海自の輸送艦「おおすみ」と連携した。

4 令和7年度多国間訓練 「カーン・クエスト25」

陸自および空自は、2025年6月、モンゴルおよび米国主催の多国間訓練に参加した。本訓練は、国連PKOにかかる能力向上を目的とした世界最大級の多国間訓練である。本訓練では、陸自が車列警護や国連指定施設警護などの実動訓練に参加し、空自が航空機の運航支援のために必要な情報を提供して訓練を実施するなど、PKOなどへの派遣に資する各種能力の維持・向上、ノウハウの獲得・蓄積および参加各国との相互理解の促進・信頼関係を強化した。



動画：スーパー・ガルダ・シールド25

URL：https://youtu.be/epv7SB0Wufo?si=Eodk7J4j1Zw_rzc0

5 イタリア陸軍主催多国間空挺演習「マングスタ25」

陸自は、2025年11月、イタリア陸軍主催の多国間空挺演習に参加し、イタリアをはじめ、米国および欧州各国の部隊とともに共同による自由降下に引き続く一連の作戦行動を演練した。本演習は、陸上自衛隊が初めて参加する欧州本土での空挺作戦に関する訓練であり、空挺作戦を共同で実施することで、自衛隊の戦術技量の向上および各参加国軍との連携を強化した。

6 多国間空挺演習

陸自は、2026年1月、陸上自衛隊が主催する国内で初めてとなる空挺作戦を演練する多国間演習を実施した。本演習は、日米英による空挺降下などを演習するほか、降下後の地上作戦を含む一連の行動を演習するとともに、オブザーバーとしてカナダ、フランス、ドイツ、インドネシア、イタリア、ポーランド、シンガポール、トルコ、マレーシア、スペインの10か国が参加し、インド太平洋地域における同盟国・同志国などとの連携・関係の強化および空挺作戦にかかる戦術技量を向上させた。

7 英空母打撃群（CSG25）の展開に伴う共同訓練

英国は、空母「プリンス・オブ・ウェールズ」を含む空母打撃群を2025年8月から9月にかけて日本に派遣した。その際、海自は、英空母打撃群、米空母打撃群、豪駆逐艦、スペインおよびノルウェーのフリゲート艦などとの共同訓練を行った。また、空自は、英海軍のF-35B戦闘機と共同訓練を行った。

8 北米・欧州親善訪問「アトランティック・イーグルズ」

空自は、2025年9月、空自初となる戦闘機の欧州展開を行い、各国との部隊間交流を行った。欧州・大西洋とインド太平洋の安全保障は不可分であり、相互に関連しているとの認識を体現すべく、米国アラスカ、カナダ、英国、ドイツの各基地を訪問し、各国における部隊交流を通じ、相互理解の促進を図った。

参照 図表Ⅲ-3-2（同志国などとの二国間・多国間による主要訓練）、資料61（多国間共同訓練の参加など（2022年度以降））



VOICE

イタリアにおける多国間空挺演習（マングスタ25）に参加して

私は、2025年11月に実施されたイタリアにおける多国間空挺演習「マングスタ25」に参加しました。陸上自衛隊として、欧州本土で実動演習を行うのは初であり、私はイタリア空軍機からの空挺降下を担当し、隊員を安全確実に降下させることができました。終盤の総合訓練においては、参加した7か国の言語の違いを乗り越えて各国軍と心をつにし、任務を完遂することができました。戦後最も厳しく複雑な安全保障環境のもと、同志国の地で各国の隊員と一緒に汗を流すことの意義を再認識するとともに、陸自として初となる本演習に参加した誇りと自信を胸に、引き続き、自己の職務にまい進する所存です。

第1空挺団 習志野 訓練幹部 1等陸尉 まつだ けい
松田 溪



イタリアにおけるイタリア軍航空機からの
イタリア軍落下傘を使用した空挺降下



解説

英空母打撃群の寄港

2025年、英国は空母「プリンス・オブ・ウェールズ」を旗艦とする空母打撃群 (CSG25) Carrier Strike Group 25 を地中海などを経由し、インド太平洋地域に展開しました。わが国には、8月～9月まで、英空母のほか、英国海軍駆逐艦「ドレントレス」、ノルウェー海軍フリゲート艦「ロアル・アムンセン」が寄港しました。なお、ノルウェー艦艇のわが国への寄港は、今回が初めてです。

今回の寄港を捉えて、日英米豪西諸共同訓練などの様々な防衛協力・交流が行われました。特に、自衛隊による英国軍に対する初の警護や英軍F-35Bの海自護衛艦「かが」への初の着艦が実現するなど、日英の部隊間の相互運用性が向上し、より一層緊密な連携が可能となったことを示しました。また、英空母の横須賀寄港中

は、石破総理（当時）による視察が行われたほか、東京寄港中は、空母艦上でフォーラムや艦内特別見学なども行われました。

前回のCSGの日本寄港は2021年で、約4年ぶりの寄港となりました。わが国を取り巻く安全保障環境が厳しさと不確実性を増すなか、この寄港は、インド太平洋地域の平和と安定に貢献するという英国およびノルウェーのコミットメントを示すとともに、日英、日ノルウェー安全保障・防衛協力を一層強化し、わが国の安全保障に資するものです。防衛省・自衛隊は、今後も基本的価値と戦略的利益を共有する同志国と共に、引き続き緊密に連携してまいります。



石破総理（当時）の英空母「プリンス・オブ・ウェールズ」視察



英空母「プリンス・オブ・ウェールズ」東京入港



VOICE

北米・欧州親善訪問「アトランティック・イーグルズ」に参加した隊員の声

私は、2025年9月から10月にかけて実施された北米および欧州親善訪問「Atlantic Eagles」にF-15戦闘機の操縦者として参加しました。この事業は、航空自衛隊の戦闘機などにより北米および欧州を親善訪問し、部隊間交流などを通じて各国空軍との相互理解を深め、防衛協力・交流を推進することを目的として実施されました。

F-15は千歳基地を出発し、日米の空中給油機の支援を受けつつ、アメリカ（アイルソン空軍基地）、カナダ（グースベイ空軍基地）、イギリス（コニングスビー空軍基地）およびドイツ（ラーゲ空軍基地）を寄航地として、航空自衛隊の戦闘機として初めて大西洋を横断しました。

大西洋横断時には、カナダ空軍による救難待機支援を得たほか、欧州では、イギリス空軍機およびドイツ空軍機による出迎えを受け、各国空軍からの歓待とこれ

第2航空団 千歳基地 飛行班員 1等空尉 ^{なかしま}中島 ^{じょうじ}常志

までに培われた防衛協力の深化を肌で感じました。また、私が所属する第201飛行隊はイギリス空軍第3飛行隊と姉妹飛行隊の関係にあり、今回の訪問により両飛行隊間の絆を一層深めることができました。

今回の経験をこれからの任務や訓練に活かし、同盟国・同志国との協力・連携の更なる強化に貢献していきたいです。



ドイツ着陸後にドイツ空軍操縦士と握手する様子（本人左）



VOICE

インド太平洋における英国空母打撃群展開の戦略的意義と、地域安全保障に対する英国の継続的関与

英海軍空母打撃群 司令官 准将 ジェームズ・ブラックモア

英国は、自由で開かれたインド太平洋を支持するとともに、ルールに基づく国際秩序の強化に取り組んでいます。オペレーション「HIGHMAST」の下で実施された英国空母打撃群（Carrier Strike Group：CSG）の展開は、航行の自由を守り、海洋安全保障を強化し、防衛協力を深化させるため、パートナーおよび同盟国と緊密に連携しつつ、地域の安定に長期的に貢献していくという英国の確固たる意思を示すものでした。

英国によるインド太平洋地域の安全保障への貢献は、自由で開かれた地域の実現へのコミットメントと、パートナーシップの強化および国際的なルールと規範の維持を目指す戦略的取組に基づくものです。旗艦である空母HMS「プリンス・オブ・ウェールズ」を中核とする空母打撃群がオペレーションHIGHMASTの下で展開したことは、こうしたコミットメントを具体的に示すものです。幅広い軍同士の交流プログラムを通じ、英国は遠方においても信頼性の高い戦力を展開できる能力を示し、地域における信頼できるパートナーとしての役割を改めて確認しました。

CSGの活動には、インド海軍およびインドネシア海軍との共同訓練、ならびに米国、オーストラリア、ニュージーランド、日本の艦艇との緊密な連携に加え、カナダ、ノルウェー、スペインといったNATO加盟国との連携も行われました。これらの活動には、航行の自由に関する行動、多領域の演習、国連安全保障理事会決議（UNSCR）の履行に関する活動などが含まれ、英国がパートナーおよび同盟国と効果的に連携して作戦を遂行できる能力を有していることを示しました。

今回の展開は、軍事的な活動にとどまらず、外交、経済及び文化交流といった取組も含むものです。寄港地において各国の政府高官などを艦上に迎えることで、CSGはハイレベルでの国際対話を促進し、地域の安全保障協力を一層強化しました。このように、複数の政府機関が関与する統合的な取組は、インド太平洋地域の安定と繁栄の促進に取り組む英国の姿勢を示すものでした。

インド太平洋における英国空母打撃群展開の戦略的意義

英国空母打撃群のインド太平洋への展開は、同地域において積極的な役割を果たすという英国の戦略的意思

を象徴する画期的な出来事でした。CSGはハードパワーを展開すると同時に、外交、経済、そしてソフトパワーの面でも大きな成果をもたらしました。これにより、志を同じくするパートナーとの間で、国家安全保障と繁栄を確保するための、更なる協力の基盤を築きました。

また、この展開は、世界各地で発生する事象に対応し得る海上戦力の柔軟性と即応性を示すものであり、政府に対して多様な選択肢と行動の自由を提供し得る能力を実証しました。さらに、直接的な軍事的利益にとどまらず、本展開は戦略的成長を促進する機会にもなり、海洋、航空、サイバー、複合兵器といった複数の領域において、能力面での協力や防衛装備品の輸出機会が地域全体で促進されました。こうした幅広い協力の機会は、英国が信頼される戦略的かつ経済的パートナーであることを示すものです。

英国は2021年にも空母機動部隊の派遣を実施しましたが、今回のオペレーションHIGHMASTは、この派遣を基盤とし、インド太平洋地域における英国の戦略的プレゼンスを更に強化する重要な節目となりました。注目度の高い防衛交流を通じて、二国間関係を強化するとともに、産業協力を促進することで、安全保障、外交、経済成長という目標の同時の達成に寄与しました。また、本展開は、政府一体となった取組の重要性とともに、空母打撃群が有する多様な活動を結集させた力を改めて示すものとなりました。

多国間海軍協力の重要性

多国間海軍協力は、相互運用性を高め、同盟関係を強化し、国連海洋法条約（UNCLOS）に代表される国際規範を維持するという点において、英国のインド太平洋戦略における重要な柱となっています。CSGの展開は、こうした運用上の有効性を明確に示すものであり、クロスデッキ運用、戦術訓練、タスク・グループとしての活動、多領域演習などが実施されました。これらの取組は相互運用性を向上させただけでなく、オーストラリア、シンガポール、日本などの外国港湾における共通の後方支援基盤や整備能力の活用がもたらす、グローバルな利点を示すものでもありました。

日本の海上自衛隊、米海軍、米海兵隊、オーストラリア海軍、ニュージーランド海軍といった地域のパート

ナー部隊との活動は、真の相互代替性と協力の重要性を示すものでした。例えば、英国のF-35が日本の護衛艦「かが」に初めて着艦したこと、米国および日本の部隊とのクロスデッキ運用、そして護衛艦「あけぼの」がCSGとともに約2か月間にわたり訓練を実施したことなどは、こうしたパートナーシップがもたらす作戦上・戦略上の利点を示しています。これらの活動は、集団安全保障に対する英国のコミットメントと、地域においてパートナーおよび同盟国と円滑に作戦を遂行できる能力を改めて示すものでした。

変化する地域安全保障環境に対する英国の視点

インド太平洋地域は、経済的活力に富む一方で緊張の高まりも見られ、地政学的な重要性を増しつつあります。英国の国家安全保障戦略に示されているとおり、また欧州・大西洋とインド太平洋の安全保障が不可分であるとの認識に基づき、インド太平洋地域における英国の二国間関係およびパートナーシップは、国際安全保障の強化を通じて、英国の繁栄を支えるものになっています。英国は、国際的なルールと規範を擁護・形成し、地域のパートナーシップを強化するとともに、航行の自由を守ることに取り組んでいます。

オーストラリアおよび米国とのAUKUS、日本およびイタリアとのグローバル戦闘航空プログラム（GCAP）といった英国の戦略的取組は、相互運用性を高める能力面でのパートナーシップを促進するという英国のアプローチを示すものです。これらの取組は、地理的な隔たりを越えてパートナー間の連携を強化し、英国がグローバルな安全保障の担い手としての役割を果たしていく姿勢を示しています。

また、CSGの日本への展開は、インド太平洋地域に対する英国のコミットメントを一層明確に示すものでした。HMS「プリンス・オブ・ウェールズ」の東京への歴史的な寄港、日本の石破首相や防衛産業関係者の艦上への招待、さらには文化交流やパブリック・ディプロマシー活動は、英日防衛関係の深さを示すものでした。この訪問はまた、英国の自律的な作戦遂行能力と主要パートナーおよび同盟国と連携して行動する能力を示し、友好国のみならず潜在的な競争相手に対しても、英国の同盟関係の強固さを示す明確なメッセージとなりました。

結論

空母打撃群の展開に象徴されるインド太平洋地域における英国の戦略的な取組は、地域の安全保障、経済成

長、そして国際規範の維持に向けた英国の確固たる姿勢を示すものです。多国間・多領域にわたる協力を促進し、パートナーシップを強化するとともに、変化する安全保障上の課題に対応することにより、英国は地域における信頼されるパートナーとしての地位を確立しています。こうした統合的な取組は、インド太平洋地域の安定と繁栄に寄与するものです。



ジェームズ・ブラックモア准将



HMS「プリンス・オブ・ウェールズ」とともに航行する日米カナダ艦艇



護衛艦「かが」から発艦する英海軍F-35B
イギリス海軍より提供

図表Ⅲ-3-2

同志国などとの二国間・多国間による主要訓練

